

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520831

研究課題名(和文) アテナイ民主制と互酬性 リュクルゴス時代の再検討

研究課題名(英文) Democracy and Reciprocity: A Reconsideration of the Age of Lycurgus in Athens

研究代表者

栗原 麻子 (Kurihara, Asako)

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：00289125

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：カイロネイアの戦いは、アテナイとギリシア諸ポリスの衰退を象徴する政治史上の転換点ととらえられてきた。本研究は、この間の政治文化の連続性と変容をとらえようとするものである。とりわけカイロネイア後のアテナイにおいて財政面でリーダーシップを発揮した政治家リュクルゴスの政策が、伝統的互酬的社会秩序のうねにたってアテナイ市民共同体を再生しようとしていたことが示された。また、研究分担者・協力者とともにおこなった共同研究の成果として、2016年3月には国際ワークショップLycurgus in Transitionを開催し、経済、文化、歴史叙述、政治など多角的に、リュクルゴス時代の再検討をおこなった。

研究成果の概要(英文)：Athens in transition from the Classical Age to the Hellenistic Age has been regarded as a significant turning point in view of the political independence. This research aimed at reconsidering the transition from socio-political point of views, taking into account the continuity as well. Especially, focusing on the concept of reciprocity, Kurihara argued that the reciprocity played a fundamental role in the political thought of Lycurgus, one of the leading statesmen of the era. Together with other participants, the reconsideration of the Lycurgan age developed into an international project, first, to held a workshop in Kyoto in March, 2014, then, to publish a volume in corporation with scholars in U.S. and U.K, covering the economic, cultural, historiographical, and political context of the age of transition.

研究分野：古代ギリシア社会史

キーワード：アテナイ ギリシア 政治文化 互酬性 ヘレニズム 法廷弁論 リュクルゴス 国際共同研究

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、かねてよりアッティカ法廷弁論を用いた政治文化の研究をおこなってきた。その際、とくに焦点を当ててきたのが、民衆法廷という場における「報復」と互酬性である。本研究は、その2点を出発点として、前4世紀末の弁論家リュクルゴスの時代に焦点を当て、古典期からヘレニズムへの移行期とされるこの時代の政治文化の変容をとらえようとするものである。

2. 研究の目的

リュクルゴスがアテナイ政治上のリーダーシップを握っていたカイロネア後およそ15年間を「リュクルゴス時代」と呼ぶ事の是非をめぐっては疑問符が付せられている。そもそもリュクルゴス自身、リュクルゴスが統治したポスト古典期の再評価とともに、F. Mitchel によってその重要性を再評価された経緯がある。にもかかわらずその呼称が否定される背景としては、単一の政治家を英雄化して政治史を語る手法が現在の歴史学においてそのままでは受け入れがたいという事がある。じっさい彼の名のもとに隠れていたそのほかの政治家たち、たとえばデマデスらの活躍が再評価され、カイロネア後のアテナイは、個別の政治家が離合集散しつつ共同して国政運営にあたった時代ととらえるようになってきている。しかしながらそれらを踏まえたとえ、カイロネア直後のアテナイの政治文化を、直後より同時代人によってその時代のアイコンとされたリュクルゴスの名のもとにとらえる事には妥当性がある。

本研究の目的は、その「リュクルゴス時代」の政治文化の多面的な性格を総合的にとらえる事にある。とりわけ、アッティカ法廷弁論による政治文化の共時的な見取り図に、通事的な観点を付け加える事、碑文史料が残す顕彰等の情報を関連づけ、リュクルゴス時代の変容を総合的にとらえること、それによって移行期としての「リュクルゴス時代」の政治文化を描き出すこと、の3点が主たる目的となる。

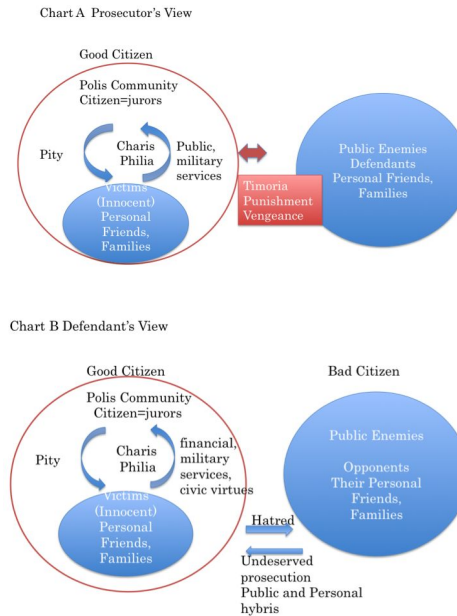
3. 研究の方法

研究代表者は、リュクルゴスの弁論にみる「報復」と互酬性について、法廷弁論を用いて検討を加え、それらを他弁論、碑文史料とつきあわせる作業をおこなった。それとともに、「リュクルゴス時代」の総合的分析のためには、共同研究が有効であると考えられるため、法廷弁論、碑文史料、経済史、政治史等の専門家を研究分担者/研究協力者として迎え、異なった史料をつきあわせて、総合を試みた。その際、政治史的な時代区分を前提として変化を強調するのではなく、カイロネア後を無前提に出発点としようとするヘレニズムの碑文研究を、弁論史料が

示す同時代的な文脈のなかに位置づけることに務めた。

4. 研究成果

(1) アッティカ民衆法廷における報復と互酬性



図に示したように、法廷弁論のレトリックでは、判決を下すべき陪審員、法廷に事件を持ち込む告発者、そして事件の被害者とのあいだに、哀れみや恩恵関係による協力関係が、いっぽう彼らと加害者とのあいだには、報復や敵意の関係が要請されている。法廷弁論は、そのようにして市民共同体内部における敵と味方の分別をおこなっていたことについて、英文査読誌 JASCA に掲載した。さらにその成果を踏まえ、リュクルゴスがそのような互酬的關係を、だれよりも明確に打ち出していたことを明らかにした。リュクルゴスを孤高の政治家として描いた D. Allen は、リュクルゴスが、プラトンの思想の影響下にそのような互酬的な観念からは離脱した存在であったと論じ通説化しているが、代表者はそのような読み方が成り立たないどころか、リュクルゴスはそのような報復における市民共同体の互酬的秩序を活用し、弁論において表明している。この結論は、彼の経済政策とも適合的である。リュクルゴスの経済政策は、その意味で彼の創造であるというよりも、340年代のアテナイにおける顕彰碑の増加に見いだされるような、伝統的な互酬的秩序を適用したものとみることができる。同じくリュクルゴスによるエフェベアの改革にも軍事面における共同体性の重視をみることができる。

(2) リュクルゴスのエイサングリア

リュクルゴスにとって、コイノニア(共同体性)はどのようなものととらえられていたのか。代表者はこの問題について、弁論においてリュクルゴスに反発した、ヒュペレイデスとの比較のもとに改めて考察した。リュクルゴスによる、「裏切り者」にたいする弾劾裁

判を検討する事で、彼が互酬的共同体を、女・子供も含む広い意味でとらえていたことを明らかにした。これに関連して、前4世紀アテナイ法廷弁論の家族像、古典期アテナイにおける女性像についても検討し、その成果を公表した。

(3) 代表者はまた、いわば「長期のリュクルゴス時代」をみるための重要な資料であるデモステネスの『ネアイラ弾劾』を読み込み、その注釈の作成に当たるとともに、この間のエヴェルジュティズムの進展について、銀行家パシオンの事例を手がかりにして予備的考察をおこなった。

(4) 弁論から得られたこれらの成果を、より総合的な枠組みの中に位置づけるために研究分担者のほかに協力者として橋本資久、中尾恭三、篠原道法、上野慎也各氏の協力を得て共同研究をおこなった。国内では、2012年度は11月と3月、2013年度は6月、10月、1月の3度に渡る準備会を行ない、研究分担者、協力者とともに研究報告・討論をおこなった。また年度末のワークショップの準備の為に4月から5月にかけてロンドンで研究打ち合わせをおこない、これらを受けて2014年3月、京都において国際ワークショップ *Lycurgus in Transition: Old and New* (変容のなかのリュクルゴス 古きものと新しきもの) を開催し、以下の報告を得た。

第1部 碑文史料にみる変化と連続性

Akiko Moroo: For Health and Safety of the Boule and the Demos of the Athenians: Inscriptions and Public Discourse

第2部 外国人を取り込む

Motohisa Hashimoto: Athenian Proxenia and the Popular Sentiments in the third Quarter of the 4th century BC.

第3部 法廷における報復と共同体

Asako Kurihara: Vengeance, Reciprocity, and Community in Lycurgan Eisangeliai.

Lene Rubinstein: Communal Revenge and Emotional Appeals in Attic Forensic Oratory of the Lykourgan Era. Continuity or Change?

第4部 名誉、記録、過去の創造

Adele Scafuro: Reading Wreaths: the Evolution of Honors in Fourth Century Athens

Graham Oliver: Autobiography, Lycurgus, and the Shaping of History in Early Hellenistic Athens

総括

ワークショップは、古典期からヘレニズム期の移行期としてのリュクルゴス時代の変化を社会の深部からとらえようとするものであり、とりわけ次の点に関して集中的な議論がおこなわれた。第1に、カイロネア後のアテナイが危機と不安の渦巻く時代であったという共通認識が得られた。第2に、外国

人との個人的関係について、プロクセニア顕彰をおこなうアテナイ市民側の視点にたった検討の結果、裏切りや内通の疑念が顕彰を抑制していた可能性が論じられた。墓碑を通じてこの時代の外国人のおかれた状況を検討する試みもなされた。第3に、危機と市民団再生の時期において、互酬的な関係性が、法廷に置ける復讐においても、市民や外国人にたいする顕彰行為に置いても重要視されていた事が指摘された。第4に、その顕彰行為のありかたや対象の変化、危機に応じた碑文慣行の変化が論じられた。これらの議論を通じて、時代の転換点は、カイロネアの戦いという政治史上の区分ではなく社会史的には前4世紀中葉であったこと、テーバイ陥落後の危機の時代をとらえるためには、前403年の回復民主制期との比較が今後課題となる事が確認された。またこのワークショップをさらに発展させて *Lycurgus in Context* (仮題)としてまとめることが約束され、いくつかの手つかずの要素-とりわけ過去の栄光のリバイバルの問題や、エフェボス制度(初年兵の教育・軍事教練)の変革、宗教政策についても協力者を得ることとなった。Adele Scafuro, Lene Rubinstein, Graham Oliverの三氏を新たに研究協力者とした。

(5) 2014年度、2015年度は、新たな執筆者を加えつつ、その成果を一書にまとめるための編集業務に充てられた。2014年4月には引き続き Rubinstein 氏と大阪で、同年8月夏には共同編集者である Scafuro 氏とアテネで、また同年11月には代表者のサバティカルを利用してオクスフォード、ロンドン、プロヴィデンスで執筆陣や序文、出版企画書についての作成/打ち合わせ、原稿の査読をおこない、残余の期間においてもメールによる査読、新たな依頼等の業務にあたった。この企画のための作業は現在まだ継続中である。(6) これらに付随して、2014年4月に、阪大法学会主催になる研究会に Rubinstein 氏を招聘し、前4世紀アテナイの法慣行についての講演内容の翻訳を『法学研究』上に掲載した。

(7) 移行期としてのリュクルゴス時代の意義を、ヘレニズム・ローマ期のギリシア世界のなかに位置づけるために、最初の一步として、小アジアの都市文化についてのワークショップ *The Asia Minor Workshop: Understanding the process of Hellenization in Asia Minor* (京都大学、2016年3月18日-21日、主催師尾晶子氏) を共催し Riet van Bremen 氏を招聘した。同25日に東京でおこなわれたセミナーにおいて、エフェボス制度と関わりの深い、クレタ島の Neotas (若者) についての講演会を開催した。Van Bremen 氏はヘレニズム/ローマ時代のリュキア家族史についての専門家であり、今後リュクルゴス時代の公私関係について得られた知見を深めていく為の有意義な意見交換もおこなうことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 13 件)

1. Akiko Moroo, 'The Origin and Development of Acropolis as a Place for Erecting Public Decrees', in T. Osada ed. *Parthenon Frieze*, 2016, 31-48. 査読なし。

2. 栗原麻子「家族の肖像」『史林』(2016) 3-33 ページ。査読あり。

3. Asako Kurihara, 'IDIAI DIKAI: A sense of community in Demosthenes 21 (Against Meidias)', *KODAI* 10 (2015), 57-68. 査読あり。

4. Asako Kurihara, 'Pity and Charis in the Classical Athenian Courts', *JASCA* 2 (2014), 67-88. 査読あり。

5. 栗原麻子「民主制下アテナイにおける『おんな男(ホ・ギュンニス)』と『男のなかの男たる女(ヘ・アンドレイオタテ)』」『西洋古代史研究』14(2014)、1-29 ページ。査読なし。

6. 栗原麻子「アッティカ民衆法廷における報復のレトリック リュクルゴス『レオクラテス弾劾』を中心に」『西洋史研究』43(2014)、1-27 ページ。査読あり。

[学会発表](計 5 件)

1. 栗原麻子「家族の肖像」、史学研究会例会(京都大学)、2015年4月17日。

2. 栗原麻子、師尾晶子ほか、ワークショップ *Lycurgus in Transition: Old and New*, 関西セミナーハウス(京都)、2014年3月28-30日。

3. 栗原麻子「古典期アテナイの互酬的秩序リュクルゴスを中心に」、第32回東北大学西洋史研究会大会(立教大学)、2013年11月9日。

4. 師尾晶子、(コメンテータ)シンポジウム「歴史家のわかること、わからないこと 西洋古代史学と歴史関連学」、西洋史研究会(東北大学)、2012年11月11日。

5. Kurihara Asako, *Pity and Charis in the Athenian Popular Court*, Classical Association Annual Meeting, Exeter, 2012, April 13.

[図書](計 1 件)

秋田茂、永原陽子、桃木至朗ほか編、栗原麻子ほか著、『「世界史」の世界史』、2016年(7月予定)、ミネルヴァ書房。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

栗原 麻子 (KURIHARA, Asako)

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：00289125

(2) 研究分担者

師尾 晶子 (Moroo, Akiko)

千葉商科大学・商経学部・教授

研究者番号：10296329